

兵庫県森林動物研究センターシンポジウム

野生動物の保全と管理 —新たな段階に向けて—



日 時：平成27年2月21日（土）

13：30～16：30（受付12：30より）

会 場：兵庫県立美術館ミュージアムホール

開催趣旨

全国的にシカ、イノシシなどの野生動物対策が強化されつつあり、保全と管理の社会的な取り組みも大きく変わってきました。兵庫県では全国に先駆けて対策を強化し、各方面で様々な努力を続けています。このシンポジウムでは、その対策の成果を検証し、その到達点をふまえて、新たな段階への野生動物管理のありかたを議論します。

プログラム

開会 13:30

開会あいさつ

河合 雅雄（森林動物研究センター 所長）

話題提供

1. シカ対策強化の効果はどれだけ出てきたのか？

藤木 大介（森林動物研究センター 主任研究員）

2. 堅果類大凶作でツキノワグマの生息状況はどう変わったか？

中村 幸子（森林動物研究センター 研究員）

3. ニホンザルの保護と管理をいかに両立してきたか？

鈴木 克哉（森林動物研究センター 研究員）

4. 対策強化の成果を踏まえた今後の課題

横山 真弓（森林動物研究センター 主任研究員）

パネルディスカッション

コーディネーター 林 良博（森林動物研究センター 研究統括監）

閉会 16:30

開会あいさつ



河合 雅雄（かわい まさを）

【現在の役職】

兵庫県森林動物研究センター 所長
京都大学 名誉教授
兵庫県立人と自然の博物館 名誉館長
兵庫県立丹波の森公苑 名誉公苑長 等

【主な経歴】

1952年 京都大学理学部卒業
1970年 京都大学 教授
1978年 京都大学霊長類研究所 所長
1987年 京都大学名誉教授、財団法人日本モンキーセンター 所長
1991年 日本福祉大学社会福祉学部 教授
1995年 兵庫県立人と自然の博物館 館長

【主な著書】

「人類以前の社会学—アフリカに霊長類を探る」（教育社）
「子どもと自然」（岩波書店）
「人間の由来上・下」（小学館）
「少年動物誌」（福音館書店）
「河合雅雄著作集全 13 卷」（小学館）
「河合雅雄の動物記 (1) ～ (8)」（フレーベル館）
「ユカの花物語」（小学館）
「サル学者の自然生活讃歌 森に還ろう」（小学館）
「小さな博物誌」（小学館）
「動物たちの反乱 増えすぎるシカ、人里へ出るクマ」（PHP新書）
その他多数

シカ対策強化の効果はどれだけ出てきたのか？

兵庫県森林動物研究センター 主任研究員
(専門分野 森林生態学 (生息地管理))
兵庫県立大学 自然・環境科学研究所 准教授

藤木 大介
(ふじき だいすけ)



はじめに

兵庫県では 2010 年時のシカ保護管理計画の変更にあたり、ニホンジカ(以下、シカ)の年間捕獲目標頭数を前年度の 1.5 倍となる 3 万頭以上へと大幅に引き上げました。本講演では、シカの捕獲対策強化の効果について検証します。

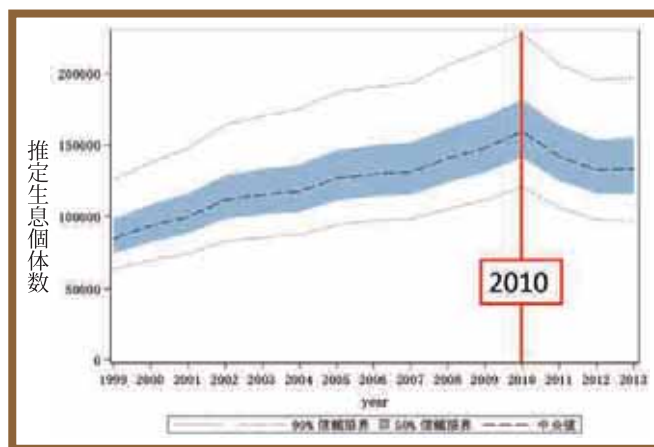


図1 県本州部におけるシカの個体数変動の推定値

モニタリング・データから見えてきたこと

最新のモニタリング・データの分析から、シカの生息個体数は 2010 年度をピークに減少傾向へと転じていることが示されました。一方で捕獲目標の達成状況は、地域によって様々であり、農業被害の軽減や森林の下層植生衰退防止は目標の達成状況に応じて効果が出ている地域、出していない地域があることが判りました。

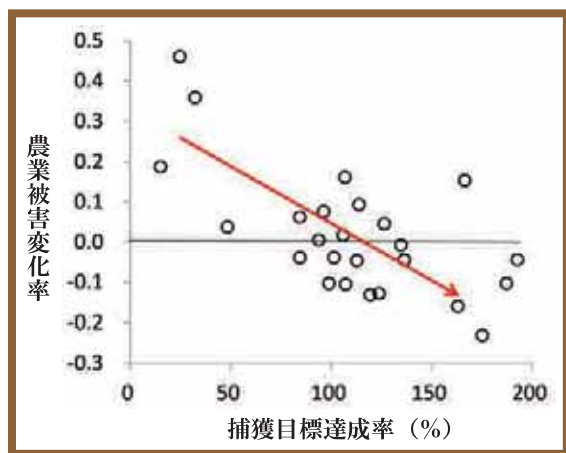


図2 シカの捕獲目標達成率と農業被害変化率

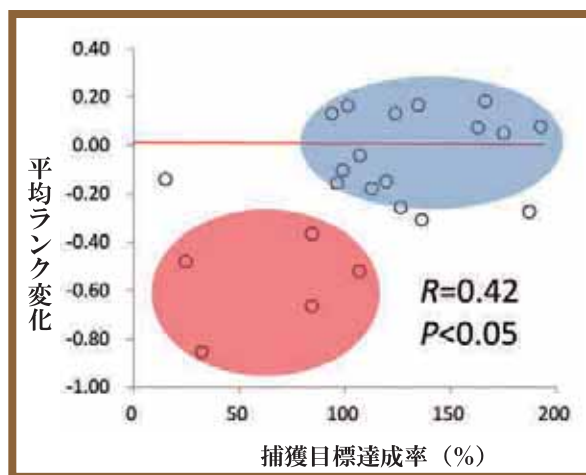


図3 シカの捕獲目標達成率と森林層植生衰退度のランク変化

まとめ

捕獲目標を達成している地域では、対策強化による一定の効果が認められましたが、捕獲対策が進んでない地域もある結果、その効果が全県的に波及するに至っていません。対策強化の足並みを揃える必要があります。また、対策強化の取り組みは計画の途中段階にあることから、捕獲目標を達成している地域も含めて被害の軽減には今後の継続的な取り組みが必要不可欠となります。

堅果類の大凶作でツキノワグマの 生息状況はどう変わったか？

兵庫県森林動物研究センター 研究員
(専門分野 保全医学)
兵庫県立大学 自然・環境科学研究所 講師

中村 幸子
(なかむら さちこ)

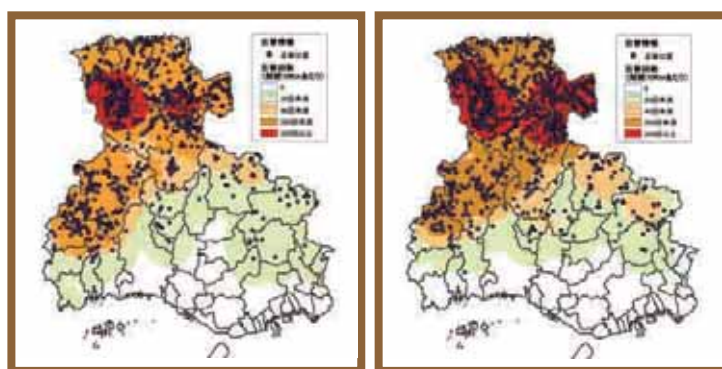


2010 年に起こったこと

2010 年の秋は、コナラ、ミズナラ、ブナの三種類の堅果類が大凶作でした。その結果人里へ出没するクマが激増し、クマの目撃件数、錯誤捕獲および有害捕獲件数が過去最多となりました。また有害捕殺されたクマは 69 頭で、これまでにない頭数のクマが捕殺されました。

生息分布の拡大・目撃件数の増加

これまでに報告がなかった地域での目撃や捕獲の報告があり、クマの生息地が拡大していると推察されます。また、2010 年以降も、捕獲数、目撃件数ともに増加傾向にあります。例えば、同じ堅果類の豊作年と比較すると、2007 年の目撃件数は 190 件であったのに対し、2012 年は 488 件でした。



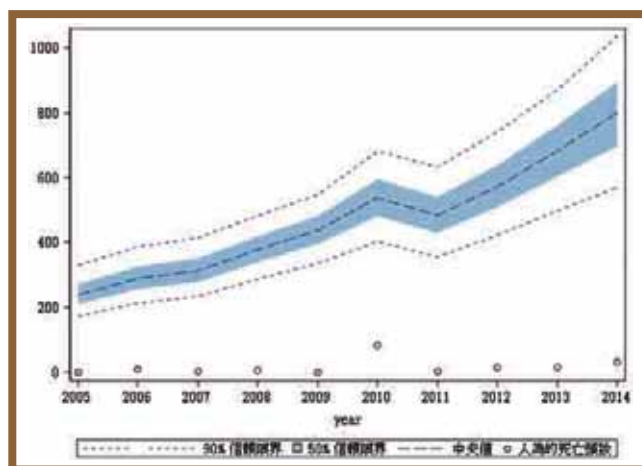
図：クマの目撃情報地点の変化
(左) 06~09 年の 4 年間の目撃地点 (右) 11~14 年の 4 年間の目撃地点

雌グマの繁殖状況は良好

2012 年から 2014 年に捕殺された成獣メス 27 頭について、繁殖状況を判断するために、子宮の胎盤痕と卵巣の黄体を観察しました。その結果、全体の 96% を占める 26 頭で黄体または胎盤痕が確認されました。良好な繁殖状況を保っていると推察されました。

推定個体数は増加

再捕獲情報や発信機追跡情報の分析により、クマの生存確認率は最低でも 70% はあると推察されます。統計解析での結果から、近年の自然増加率は平均で 18.4% と推定しています。2010 年の堅果類凶作と多数の捕殺の影響で、生息数は一時減少しましたが、高い生存率と良好な繁殖状況により、2010 年以降も着実に増加し、現在は推定生息数 800 頭に迫っています。



図：クマの推定生息数の推移

ニホンザルの保護と管理をいかに両立してきたか？

兵庫県森林動物研究センター 研究員
(専門分野 保全社会学 (ヒューマンディメンション))
兵庫県立大学 自然・環境科学研究所 講師

鈴木 克哉
(すずき かつや)



はじめに

兵庫県に生息するニホンザルの群れはすべて農作物に被害を出しており、人への威嚇や住宅周辺で生活被害が発生する地域もあるなど、被害問題への対処は深刻な課題となっています。一方で、生息数は6地域に約14～5群が生息するのみで他県と比べても少なく、分布は孤立しています(図1)。各地域では、被害対策として毎年有害捕獲が行われており、無計画な捕獲が続くと地域的な絶滅が起こる可能性もあります。



図1 兵庫県のニホンザルの分布と個体数(2014年度調査結果)

群れの安定的維持と被害の減少

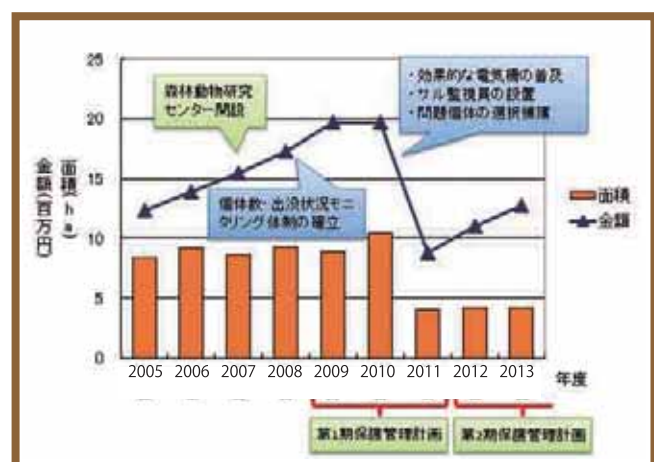


図2 ニホンザルによる農作物被害の推移と実施された主な対策

兵庫県では、2007年に森林動物研究センターが開設されて以降、毎年、各群れの個体数や出没状況を適切に把握したうえで、メスの成獣の数を基準とした計画的な個体数管理と、地域が主体となった効率的な被害管理を進めてきました。特に、①有効な電気柵の効果検証と普及、②サル監視員の設置による住民対策支援、③問題個体の選択捕獲、等の対策により、2010年度以降は、被害金額・面積が大幅に減少しました(図2)。

今後の課題

一方、最近ではこれまで被害がなかった地域に行動域を変化させる群れも確認されており、2012年度以降の被害額はやや増加している傾向にあります。これまで確立してきた方法論を活かして、新たな地域でも計画的に被害軽減を図る必要があります。また、毎年のモニタリング結果から、各群れは農作物に依存しているため繁殖率が高くなっている傾向にあり、有害捕獲によって個体数の増加を抑えている状態であることも分かりました。今後も個体群の安定的な維持に注意を払いながら、計画的な管理を推進していく必要があります。

対策強化の成果を踏まえた今後の課題

兵庫県森林動物研究センター 主任研究員
(専門分野 危機管理学)
兵庫県立大学 自然・環境科学研究所 准教授

横山 真弓
(よこやま まゆみ)



保護管理の進展

兵庫県では、鳥獣保護法に基づきシカやイノシシ、ツキノワグマ、ニホンザルの特定鳥獣保護管理計画を策定し、生息状況調査、防除や捕獲の技術開発、対策効果の検証を行ってきました。徹底したデータ収集に基づく解析により、状況に応じて対策も変化させてきました。

また、年間のべ6000～9000人もの被害関係者、行政関係者に研修会などにご参画いただき、被害防止対策にも力を入れてきました。このような取り組みが功を奏し、様々な形となって成果が表れてきています。

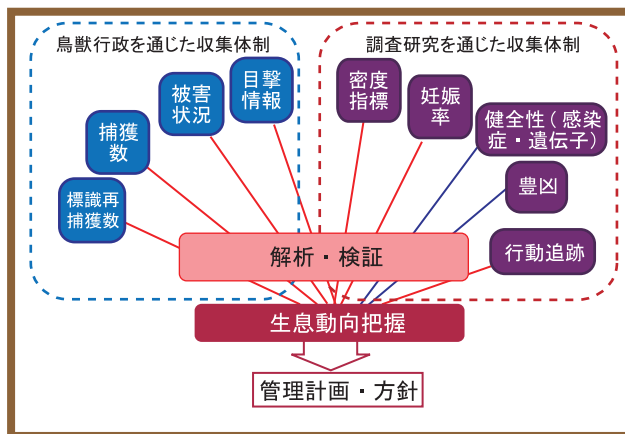


図 野生動物管理のためのモニタリングの項目

今後の課題

ここまで野生動物の対策を行ってきても、軋轢を引き起こす野生動物たちの増加は続き、新たな課題も出始めているのも事実です。生息していなかった場所への分布拡大によって、被害が急増している地域もあります。そのため、被害が少ない時期から捕獲を開始する等、初期の対策の重要性が高まっています。また、哺乳動物に寄生するマダニが、新たな人獣共通感染症を引き起こすウイルスを媒介することが発見され、捕獲従事者は、マダニ対策も強化することが求められるなど、対策者の取り組みには多くの労力が必要となっています。研究センターでは、必要な情報や取り組みをいち早く収集し、新たな課題にも取り組んでいきたいと思っています。

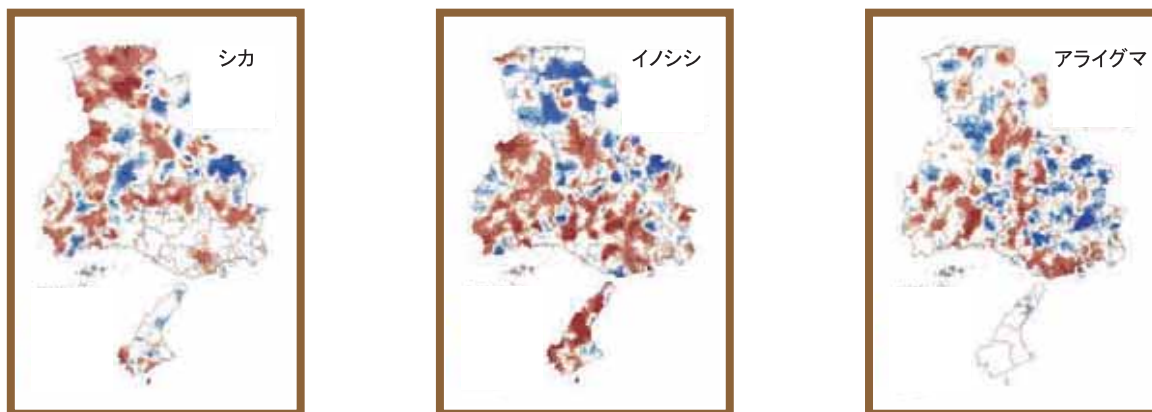


図 農業被害の増減率（2008年→2012年）
赤色：増えたところ 青色：減ったところ

パネルディスカッション

皆様に記入していただいた質問票をもとに進めます。
話題提供を行った、発表者との討論を行います。

コーディネーター



林 良博 (はやし よしひろ)

【現在の役職】

兵庫県森林動物研究センター 研究統括監
東京大学 名誉教授
公益財団法人山階鳥類研究所 所長
国立科学博物館 館長 等

【主な著書】

「ヒトと動物 野生・家畜・ペットを考える」(朔北社)
「こども地球白書 1999～2007」(ワールドウォッチジャパン)
「犬が訴える幸せな生活」(光文社)
「ペットは人間のお医者さん」(東京書籍)
「イラストでみる猫学」(講談社)
「幸せになる犬との暮らし」(幻冬舎)
「老犬とどう暮らすか」(光文社)
「現代日本生物誌・1～12」(岩波書店)
「絶滅危機動物図鑑」(講談社)
「動物たちの反乱 増えすぎるシカ、人里へ出るクマ」(PHP新書)
その他多数

【主な経歴】

1969年 東京大学農学部畜産獣医学科卒業
1975年 東京大学大学院農学系研究科獣医学専攻博士課程修了
1990年 東京大学農学部 教授
1996年 東京大学大学院農学生命科学研究科 教授
2004年 国立大学法人東京大学 理事・副学長
2005年 東京大学大学院農学生命科学研究科 教授
2010年 東京農業大学農学部 教授
2013年 国立科学博物館 館長

お知らせ

「ミニ企画展」開催場所募集中 (兵庫県内に限らせていただきます)

センターが推進している「科学的・計画的な野生動物の保全と管理(ワイルドライフ・マネジメント)」へのご理解をいただくための展示を行います。

県内に生息する野生動物のはく製展示や野生動物の生息状況、野生動物による農業被害など人と野生動物の間の様々なあつれきをパネルで紹介します。野生動物の生態や被害対策についてのパンフレットも配布しています。



- ◆ 申込み方法: センターまたは、各地域の農林(水産)振興事務所へお問い合わせの上、お申込みください。
申込み様式はセンター HP にもございます。

森林動物研究センター施設公開 夏開催予定



森林動物研究センターでは、毎年夏休み期間中に施設の一般公開と研究成果の発表会を開催しています。

なお、詳細が決まりましたら、当センターのホームページなどでご案内いたしますので、是非ともお越しください。



MEMO

